

唐招提寺
所 蔵

傳藥師如来・獅子吼菩薩立像実測調査概要

美術工芸研究室

唐招提寺所蔵の伝薬師如来立像、伝獅子吼菩薩立像、伝衆宝王菩薩立像（以下、薬師、獅子吼、衆宝王と略称）の3軀は、その共通した独特な作風によってよく知られている像であるが、とくにこれらが類例の少ない豊かな素材と、特色ある量感を示した一木彫成像として注目される。そこで、このたび前2像の実測調査を試みたので、その実測結果と検知した素材性の若干についてふれておきたい。

実測方法は像の正側2面に高さ24cm、巾15cm、厚さ5cmの方形枠を設定し、その枠面にあらかじめ前後2重に張つた5mm方眼グリットを透視して像面を把握するいわゆるグリット投影図法によつた。像の正面の決定は像の正中線を基準に、枠の正中グリット及び別に枠と像との間に垂らしたさげふりとを同時に見透して定めた。

その結果、第1・2図のような両像の正側2面の実物大原図を作製することができた。実測図の表現は像容の輪郭・稜線を実線に、また稜谷線でも鈍く自然に消える部分は破線に、亀裂線（干割れ）の主なものなどはやゝ細い実線で示し、さらに原図では正面図に木目の主なものを適宜朱線によつて図示した（第1・2図の正面図）。原図における誤差は断定はできないけれども、透視あるいは表現上の誤差を考慮しても、グリット交点では1〜2mm内、その他の点でも2〜3mm内外で

おさえられるものとみられる。（第1・2図のグリットは10cm単位）

以下、実測図を通じて両像の素材の規模、木取り方法、性状について略述する（なお必要に応じて衆宝王についてもふれる）。

一、素材の規模 両像は松材の芯去り辺材を用いた一木彫成像であるが、いずれも像、蓮肉、同軸部を共にする総長（総高）233.5・202.5cm、巾（肘張）55.6・54.2cm、奥行（蓮肉前後径）39.5・37.0cm（以上、前者が薬師、後者が獅子吼）の一材から彫出している。また各像は後述のように辺材の木表から木芯方向に彫出しているので、素材の奥行はほぼ蓮肉前後径に相当し、これに各々の木芯距離（O-P）を加えれば、原材における半径を復元的に推定できる（第3図）。したがって、両像の原材は少くとも直径94〜120cm前後の巨材であつたものと考えられる。

なお、実測図（第1・2図）では蓮華座軸部の受座以下は図示されていない。図示されない軸部は薬師では受座からさらにそれを載せる箱座に約23cm貫通し、その先端は凹形に切り込まれて、この部分が箱座内部の仕切り板にくい込んでゐる。一方、獅子吼の軸部は受座の中央孔深さ5.3cmで終り、その先端には柄孔がうがたれて、こゝに逆に受座下の框座から出る柄がくい込んでゐる。いずれも受座以下の修補期

における処置とみられる。

二、木取り 両像の原材における木取りを断面(蓮肉上面)にて模式的に図示したのが第3図である。さきにもふれたように各像の断面の木取りは、いずれも像正面を木表方向に向ける。いゝかえれば像は辺材の木表から木芯方向に彫出している。この場合、原材における木芯位置は薬師が最も離れ($O_1 \sim P_1 23cm$)、次いで獅子吼($O_2 \sim P_2 10cm$)、

第1図 伝薬師如来立像実測図 像高 174.5cm 髪際高 152.3cm

衆宝王($O_3 \sim P_3 10$)の順となっている。この木芯位置の差異は樹幹の上下、あるいは樹幹の異同によるものか容易に断定できないが、後述の年輪密度(第1表)を考慮に入れると少くとも衆宝王の原材の樹幹は比較的高い位置のように推測できる。また、この木芯位置の差異は像の現状における細かな干割れの方角の違いとなって現われている。たとえば衆宝王の蓮肉上面の干割れ方向が、他に比較して著しく蓮肉中心方向に入り込んでいることによっても容易に肯けよう(第3図)。

次に、像の正中線と木芯方向との関係についてみると、薬師、衆宝王ではそれら両軸がほぼ一致しているのに対して、獅子吼においては正中線が木芯方向からやや左寄りに外れているのが注意をひく。これは像の正面に現われている木目の位置とも関係して、薬師、衆宝王においては正中線を軸にほぼ対称的な位置に木目が現われている(第1図)が、獅子吼では主として正中線の右側、すなわち左頬や左胸など左半身に偏して現われているの

が確かめられる(第2図)。

このような原材における木取り方法、すなわち像の正中線と木芯方向との関係や、木目の布局とその効果などは、のちにふれる素材の年輪密度の精粗とともに、造像過程における作者の意識的な配慮と選択

によって決まるものと考えられるが、その意味では薬師における木目の布局と左右均齊な量感表現とは、すでに木取り段階において十分に配慮されていたものといえよう。また 一方獅子吼における木目位置の若干の差異は 像自体の微妙な腰のひねり、すなわち上半身における左胸にかゝる動きや、下半身、

ことに左脚をやゝ後方に引いている(第2図)動態との関係で検討する必要がある。

次に、両像の立面における像容の木取りをみると、そこには素材の垂直性が著しく支配していることが確かめられる。すなわち両像の正側両面における中心軸は、実測図に明示される通りいずれも頂中心から蓮華座軸部に垂下して、しかも正側いずれも中心線(正中線)を軸にあるいはほど左右対称的に(正面)、または前後均衡を保つよう(側面)各部が構成されている。たとえば、ほど対称的な像容をとる正面では、両像ともに蓮肉徑にこだわらずに肘部 大腿部な

第2図 伝獅子吼菩薩立像実測図

像高 175.8cm 髪際高 153.1cm

どを大きく彫出し、量感ある安定した構成をとるが、一方対称でない側面では、各部を中心軸に合わせて均衡を保ち、さらに各部いづれも下端の蓮肉径以上に出ることを避けるほか、両足を蓮肉上や、前寄りに位置させるなど、各々の中心軸の垂直性に払っている造形的な配慮は注意されなければならない。

このように両像の立面的な木取りの基本としては、素材の垂直性に順応したあくまで垂直的な中心線の配慮と、それに相応する像容の対

第3図 断面木取図

称性あるいは均衡性が重視されているとみられるが、このことは単に像の物理的な重心安定のためばかりか、量感ある安定した軀軀の表現や、上方に伸びる単純にして明確な動態表現など、像の造形的な手法にまで不可分に支配しているものといわねばならない。

三、素材の性状

各像の年輪密度を蓮実珠部分（第3図）で検知したのが第1表であ

る。像により部分によつて若干の精粗はあるが、平均して5〜9という緻密な木理であるほか、年輪幅も一様で整然としており、いわば目の通った糸柁の性状に近い良質の辺材が厳選されている。

また、各素材のいわゆる樹脂抜き

第1表 年輪表

名称	a			b			c			平均年輪密度/1cm
位置 数値	年輪数	単位 cm	密度 /1cm	年輪数	単位 cm	密度 /1cm	年輪数	単位 cm	密度 /1cm	
伝 薬 師	31	4.6	6.5	32	4.4	7.3	28	4.1	6.8	6.8
獅 子 吼	17	3.8	4.5	11	3.1	3.5	19	2.6	7.3	5.1
衆 宝 王	47	3.6	13.1	21	3.6	5.8	30	3.6	8.3	9.1

程度もきわめて良好で、観察の限りでは樹脂の酸化によるいわゆる褐変はほとんど見られず、木肌は現状においてもやゝ赤みを帯びた黄白色を呈し、いわば理想的な白太材（辺材）の性状を示している。これはたとえば同寺所蔵の伝大自在菩薩立像などとは著しく相異するところであらう。彼らが伐採後においていかに樹脂抜きが適切であったかまたいかに入念な素材の厳選が行われたかをおのずから示している。

以上、両像の実測結果とそのすぐれた素材性について略述した。なおこれらと不可分な関係で両像の造形性について詳述されねばならないが、それについては別の機会に譲りたい。

（長谷川 誠